

研究種目：基盤研究 C

研究期間：平成 19 年度～平成 21 年度

課題番号：19592620

研究課題名（和文） 「のさり」の両義性と日本人のウチ・ソト文化からみた地域ケア・システムの構築

研究課題名（英文） A study of community care system seen from ambiguity of "NOSARI" and boundary between [uchi] and [soto] in Japanese culture

研究代表者

竹熊 千晶 (TAKEKUMA CHIAKI)

熊本保健科学大学・保健科学部・看護学科・教授

研究者番号：20312168

研究成果の概要（和文）：

「のさり」は九州、特に熊本地方で病いや障害に対する価値転換として使用される一方で、差別や放任にもつながる両義的な方言であった。そのような日本のケアの文化をさらに探求していくと、家族の中で誰かが要介護の状態になった時に、「ソト」からの援助が「ウチ」に入ることへの障壁が存在することが明らかとなった。そこで、高齢化の進む公営団地で介護の実態を調査した。日本の公営団地は、築 40 年以上 5 階建て、エレベーター無しで巨大な人口集落である所が少なくない。高齢化の進行と低所得層の長期居住、独居世帯の増加などにより、孤独死、閉じこもりなど様々な問題が表面化してきた。この調査が行われる過程においても、都市型犯罪増加に伴う自己防衛、住民同士の関係の希薄化などの影響で様々な困難が生じた。この困難そのものが、団地住民の現実であり、生活実態であると理解される。日本の社会は、ウチとソトの境界が明瞭で、しかもこの境界は関与の項目ごとに多層構造になっている。この多様な関心や生活課題の内、身体のケアに焦点が当てられる場合、ウチの範囲が極めて狭く限定される。回答者においても、世話や介護といったケアに関しては身近なウチの範囲である親族に頼る傾向がみられ、特に身体接触を伴うケアはほとんど同居家族、もしくは訪問看護師が担っていた。家族の小規模化は、大家族に比べて制度的規範が弱まると考えられるが、それを補う意味において親密性が介護の重要な要素となる。しかしこの時、親密性はソトからウチへ向けてのケアの援助にとって障壁となる。ソトの人間がウチのなかに入ることは、「羞恥の感情」を生じさせない特別な条件を伴わない限り困難である。今後、将来的な介護困難は容易に予想され、これらの日本のケア文化を考慮した持続可能なケア・システムには、地域特性に応じたケア範囲の規定と専門職と近隣住民の関与項目の分担などの検討が急務である。

研究成果の概要（英文）：

"NOSARI" is a dialect which is used in Kyushu, especially the Kumamoto district. While this language was used as value conversion to illness or a handicap, it was an ambivalent dialect which leads also to discrimination or noninterference. On the other hand, it was an ambivalent dialect which leads to discrimination or noninterference. In Japan today, handicapped or elderly people are cared for by a public institution,

a family, and close relatives. This fact is generally known well.

The purposes of this research are to clarify the boundary of "uchi" and "soto" in Japanese caring culture, and to build the community care system.

Then, the actual condition of care was investigated in the public housing complex to which aging goes. The public housing complex in Japan has huge population colonies. Furthermore, it was built 40 years ago and there are 5th floors without an elevator. Advance of aging, long-term habitation of a low income group, the increase in a solitude household, etc. -- solitary death -- shutting oneself up -- etc. -- various problems have surfaced. Also in the process in which this investigation is conducted, various difficulties arose under the influence of dilution of the relation of the self-defense accompanying a city type criminal increase, and residents etc. This is housing complex residents' reality and is the life actual condition.

In Japanese society, the boundary of "uchi" and "soto" exists clearly. When someone changed into a state requiring care in a family, it became clear that the barrier of the assistance from "soto" going into "uchi" exists. This boundary spreads in a certain case, and it become narrower in another case, according to the focus of people's concern. Since special intimacy is called for in the care accompanied by the body touch, the boundary of 'uchi' and 'soto' is limited very narrowly.

Also in this housing complex, the living-together family or the visit nurse was performing most cares accompanied by body contact. Close neighborhood and relatives belong to neither 'uchi' nor 'soto', so they are usually to be exempted from the role of care. This reason is that the relationship between them and care receivers who belong to 'uchi' is characterized with incomplete intimacy and embarrassment.

From now on, prospective care difficulty will be expected in Japan. Then, it is required to specify the care range according to Japanese care culture and for professionals and neighboring residents to do a care assignment.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	800,000	240,000	1,040,000
平成 20 年度	500,000	150,000	650,000
平成 21 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1800,000	550,000	2,350,000

研究代表者の専門分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学・地域看護学

キーワード：「のさり」、ウチ・ソト、ケア文化、地域ケア・システム

1. 研究開始当初の背景

高度経済成長に伴い、都市部のみならず漁村・農山村でも人々の生活様式は大きく変容してきた。しかし、表向きの生活様式の変容にも関わらず、変化しづらい地域の生命観や障害観、社会規範に拘束された家族の行動様式や近隣とのつきあいなどがある。ケアという人間の根源的な活動のなかでは、変化しづらい人びとの価値観や社会規範が介護を受ける本人や介護する家族に大きく影響を与える。社会的にも在宅療養への移行が進められ、介護保険などの公的なサービスが充実してきたかにみえるが、サービスの地域間格差や、それを提供する者も享受する者も変化しづらいケア文化の影響を大きく受けることになる。そこで、日本のなかで介護が必要な状態となったときに人びとはその状態をどのように受け止め、家族はどのように介護しているのか、またケア・サービスを利用しているのか、近隣の人びとはどのような手助けをしているのか、事例をとおして看護の視点から明らかにしていくことで、地域の文化に根ざしたケア・システムのモデルを構築することができるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、高齢化・多様化・複雑化する日本社会において地域の文化に根ざしたケア・システムを構築することをねらいとしている。「のさり」は九州、特に熊本地方で病いや障害に対する受容などの価値転換として使用される一方で、差別や放任にもつながる両義的な方言であった。日本のなかで介護が必要な状態となったときに人びとはどのようにしてその状態を受け止め、家族はどのように介護しているか、またケア・サービスを利用しているか、また近隣の人びとはどのような手助けをしているか、事例や人びとへの聞き取りを通して明らかにしていくことを目的としている。

3. 研究の方法

ライフヒストリー法による事例へのインタビュー

これまで筆者らが調査した離島における介護調査の分析と精査

地方都市にある高齢化した巨大公営団地における生活実態調査

4. 研究成果

「のさり」は九州、特に熊本地方で病いや障害に対する価値転換として使用される一方で、差別や放任にもつながる両義的な方言であった。そのような日本のケアの文化をさらに探求していくと、家族の中で誰かが要介護の状態になった時に、「ソト」からの援助が

「ウチ」に入ることへの障壁が存在することが明らかとなった。そこで、高齢化の進む公営団地で介護の実態を調査した。日本の公営団地は、築40年以上5階建て、エレベーター無しで巨大な人口集落である所が少なくない。高齢化の進行と低所得層の長期居住、独居世帯の増加などにより、孤独死、閉じこもりなど様々な問題が表面化してきた。この調査が行われる過程においても、都市型犯罪増加に伴う自己防衛、住民同士の関係の希薄化などの影響で様々な困難が生じた。この困難そのものが、団地住民の現実であり、生活実態であると理解される。日本の社会は、ウチとソトの境界が明瞭で、しかもこの境界は関与の項目ごとに多層構造になっている。この多様な関心や生活課題の内、身体のケアに焦点があてられる場合、ウチの範囲が極めて狭く限定される。回答者においても、世話や介護といったケアに関しては身近なウチの範囲である親族に頼る傾向がみられ、特に身体接触を伴うケアはほとんど同居家族、もしくは訪問看護師が担っていた。家族の小規模化は、大家族に比べて制度的規範が弱まると考えられるが、それを補う意味において親密性が介護の重要な要素となる。しかしこの時、親密性はソトからウチへ向けてのケアの援助にとって障壁となる。ソトの人間がウチのなかに入るとは、「羞恥の感情」を生じさせない特別な条件を伴わない限り困難である。今後、将来的な介護困難は容易に予想され、これらの日本のケア文化を考慮した持続可能なケア・システムには、地域特性に応じたケア範囲の規定と専門職と近隣住民の関与項目の分担などの検討が急務である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

竹熊千晶、ケアへの関与とウチ - ソトの境界、熊本大学社会文化研究、査読無し、5巻、2007、157p ~ 172p

[学会発表](計4件)

Chiaki Takekuma 5名, "NOSARI", A WORD WHICH SUPPORTS ACCEPTING A CHRONIC ILLNESS OR A PHYSICALLY AND PSYCHOSOCIALLY CHALLENGED SITUATION IN A FAMILY AND A COMMUNITY, 8th IFNC(第8回国際家族看護学会), 2007年6月4日, Thailand Bangkok

竹熊千晶、ケアにおけるウチ・ソトの境界、

第27回日本看護科学学会、2008年12月5日、福岡

竹熊千晶、ケアへの関与における親密性と羞恥、第35回日本保健医療社会学会、2009年5月17日、熊本

竹熊千晶3名、団地住民におけるケアへの関与とウチ・ソトの境界、第28回日本看護科学学会、2009年11月27日、千葉

〔図書〕(計1件)

山崎あけみ、原礼子(編集)、竹熊千晶(分担)、家族看護学 - 19の臨床場面と8つの実践例から考える - 、南江堂、2008、104p ~ 105p

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹熊 千晶 (TAKEKUMA CHIAKI)

研究者番号：20312168

(2) 研究分担者 なし

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

田口 宏昭 (TAGUCHU HIROAKI)

研究者番号：20040503

連携研究者

日高 艶子 (HIDAKA TUYAKO)

研究者番号：50199006

連携研究者

蔵本 文乃 (KURAMOTO AYANO)

研究者番号：30389548